# ロベルト・ミヘルスの同時代人論 (2)

## ――ヴィルフレード・パレート――

氏家伸一

### 訳者前書き

本稿はロベルト・ミヘルス『重要人物―性格学的研究』"Bedeutende Männer-Charakterologische Studien"(1927)中におさめられた「ヴィルフレード・パレート」の翻訳である。本書でミヘルスが「重要人物」としてとりあげた人物は以下の通りである。アウグスト・ベーベル、エドモンド・デ・アミーチス、チェーザレ・ロンブローゾ、グスタフ・シュモラー、マックス・ウェーバー、ヴィルフレード・パレート、ヴェルナー・ゾンバルト、ヴォルフガング・ミュラー・フオン・ケーニヒスヴィンターの八人である。最後のケーニヒスヴィンターは西南ドイツ、ライン地方、即ちミヘルスと同郷の詩人で、ミヘルスの大伯父にあたるということである。他の七人は多少の差はあれ我が国でもその名を知られたドイツとイタリアの社会主義者であり、小説家であり、社会科学者である。そしてこの七人についてはミヘルスとの関連である共通性がある。それは、本書序文の語るところによると、彼らとミヘルス自身との間に結ばれた「長期にわたる個人的友情」である(最後の詩人は除く)。従ってここにおさめられた評伝は、同じ時代を共有し、かつその人物の微妙な「性格」を分析できるほどの親交をむすんだ人々の伝記である。又、ゾンバルトを除いて、他の六人の評伝は、それぞれの人

物が死去した折に書かれた思い出の文章という面を持っている。さらに、ここには一つの時代が反映しているのみならず、ミヘルス自身の思想的遍歴も反映している。

本翻訳は先ずイタリア人の評伝からまとめて順次本誌に掲載する予定である。パレートについては先号の「ガエターノ・モスカ」のところでも若干触れておいたので、ここでは、ミヘルスのパレート論の特徴と思われる論点のみをとりあげておこう。それはパレートと社会主義乃至マルクス主義との関係という問題である。

エリート理論が反自由主義的、反民主主義的であるのみならず、反マルクス主義的、反社会主義的であったことは一般に承認されている。しかし、モスカとパレートの思想は「その論敵マルクス主義の理論によって大きく性格形成決定を受けたのであった」。（中川政樹「モスカとパレートにおけるエリート理論の展開」大阪市立大学『法学雑誌』昭和四十八年・吉富・黒田記念号）逆にパレートはクローチェと並んで、一九〇〇年前後、マルクス主義陣営内部を吹き荒れた修正主義論争を「新しい水準に高めた」ともいわれている。（G・リヒトハイム『マルクス主義』）このパレートとマルクス主義との複雑な思想史的関係という問題を解く鍵を暗示的にでも提供してくれるのがミヘルスのパレート論であろう。彼は、パレートが社会主義（者）とマルクス主義（者）に対して「二正面的な構え」をとったとして、この問題に比較的多くの頁を割いているからである。

先ずパレートとイタリアの社会主義者との奇妙な友好関係があげられる。立脚点は正反対でも反体制という点では連帯できたとされる。初期のパレートは自由貿易論者であり、政府の保護主義に激しい批判をあびせていた。（"Vilfredo Pareto—Sociological Writings", selected and introduced by *S. E. Finer*, Translated by *Derick Mirfin*, 1966. Introduction by *S. E. Finer* にくわしい）エリート論者としてはブルジョア・リベラル・デモクラシーの欺瞞性を痛烈に批判したことは言うまでもない。ミヘルスがパレートの反体制的心性について親譲りの「反逆者の血」に触れているところは興味深い。

思想史的に重要なのは、晩年のパレートが社会主義者を改良主義者と革命的社会主義者とに区別し、後者を高く評価していたというミヘルスの証言である。議会主義戦術を自己目的的に追求する改良主義に対する批判はフランスの革命的サンディカリズムの理論家ジョルジェ・ソレルと共通のもので

あり、パレートとソレルとの思想的交流はその意味でも驚くにはあたらない。モスカの場合にはその欠落を嘆いていた、エリート理論とサンディカリズムとの接点がパレートには見出せるわけである。ただ、ミヘルスによれば、パレートは「サンディカリズムの神話的側面」とそのパトスを拒けた。これはソレルにとって致命的なはずであるが、ミヘルスは深くは追究していない。実は、エリート理論と革命的サンディカリズムとを、最も行動的な労働者が革命的エリートを形成する「労働者の前衛論」によって融合させ、ファシズの左翼的正当化をはかったのがミヘルス本人であった。(*Zeev Sternhell*, "Fascist Ideology" in "Fascism : A Reader's Guide", edited by *Walter Laqueur*, Pelican Books. 1979) こういう意趣は本評伝からもうかがうことができる。ともかく、改良主義的社会主義と議会制民主主義に対する批判は、各々異った政治的見地からではあるが、パレート、ミヘルス、ソレルに共通している。

次いで興味深い論点は、パレートの唯物史観に対する二正面的姿勢である。ミヘルスによると、パレートは、土台＝経済的下部構告による歴史の一元的規定というテーゼを否定する一方で、プロレタリアートのイデオロギーとしての史的唯物論は積極的に承認する。科学的真理と理論の有用性とを等置する啓蒙主義以来の伝統が断ち切られる。それだけではない。このようなパレートのマルクス解釈（もちろんミヘルスのみた）が思想史的に重要なのは、それが、歴史の客観的法則に安易に寄りかかり、理論と実践とを分離させた第二インター的「静観主義」（ルカーチ）に対する痛打を意味したからである。

最後に、エリートの対概念である大衆（「非エリート」）について一言しておこう。ミヘルスのパレート解釈の特徴は、大衆の直接的な政治化による間接的議会制民主主義の超克という視点にある。大衆の自己統治能力はパレートもミヘルスも認めない。しかしその意味は異なる。パレートはそれを端的に、事実に反する「幻想」として一蹴するのだが、ミヘルスは「議会主義の危険性」を矯正する役割を直接民主主義に期待している。民主主義の直接的と間接的形式では前者の方が後者よりもまだましなのである。もちろん直接民主主義も「良くはない」のだが。こういう表現がもし皮肉でないとしたならミヘルスの真意はどこにあるのだろうか。それはおそらく、大衆の無規定な政治的エネルギーを「議会外の権力エリートの創出過程」であるファシズムに組み入れることであ

ろう。これは「人民の同意による独裁」としてのファシズムの説明と正当化につながってくることになる。

ヴィルフレード・パレート

Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. XLVII, Heft 2.
Schweizerische Zeitschrift für Statistik und Volkswirtschaft, Jahrgang LXI, Heft 1.
Giornale degli Economisti(Roma), Heft Januar-Februar 1924.

ヴィルフレード・パレートはヴァートラントの小さな町ニヨンの近く、ジュネーブ湖のほとりセリニィの瀟酒な別荘に住んでいた。このたいへんな動物愛好家は、ただ数匹の猫に囲まれながら雄篇を書き上げるのを常としていた。一九二二年八月二日、そこで彼は他界した。

世の中には――極めて稀なことだが――とてつもなく恵まれた天性とあふれるばかりの生気をそなえているために、我々が息をひそめ、理性の制御を離れた瞬間、「彼らは不死身



であるに違いない」という想いにとらわれてしまうような人間がいるものである。ヴィルフレード・パレートも、こういう非合理的な想いを起こさせずにはいない類稀な人間の一人であった。そのためにこの人物の突然の訃報は彼の友人全員に、何か不自然なこと、法外なこと、不可能なことであるような衝撃を与えた。というのも、彼の老齢と重病については友人のみならず、夙に公けにも知られており、そのうえ、彼にとって日中八時間はあたりまえの仕事であり、しかもその仕事を、なにによって軽減されたエネルギー消費分をフルに使い、数時間延長して一層豊かなものにするべく努力していたこと、夥しい訪問客――その多くは何週間も滞在するようにと請われたものだ――は、彼の汲めども尽きぬすばらしい談話の才能によって魅了されたということもひとのよく知るところだったからである。

偉大な学者というものは、講壇や象牙の塔から地上に降りてきて、自らの姿と行いを日常の光の下にさらすようになるや否や、ごく平凡な、それどころかこれといって卓越したところの無い人物であることを暴露してしまう場合が多いものだが、人間パレートは学者そのものだという印象を分析家には与えたのである。彼は実際偉人そのものの素質をそなえて

いた。彼の人となりが全くもって並外れたものであるという印象は誰一人免れ得ないものであった。といってパレートには欠陥も無かったし、思いつきも無かったというのではない。それどころかその二つともたっぷりと持っていた。しかしこういったものとても彼にあっては何か尋常ならざる偉大な要素と注目に値する要素とをそなえていたのである。

ヴィルフレード・パレート侯爵は一八四八年パリに生まれた。母親はフランス人であった。父親はジュノアの旧い貴族の一門――ここからは何人かの有力な銀行家と外交家が出ているが、一族の他の人たちは、一八一五年ウィーン会議でジュノアを与えられたピエモンテの王室サヴォイ家と常に良好な関係にあったというわけではない――の出自だが、共和主義と愛国主義の宣伝活動に従事したために外国へ亡命せざるを得なくなった。若きヴィルフレード・パレートはトリーノ工科学校を卒業、一八七〇年工学士として世に出たが、〔一八七四年〕フローレンスに赴き、そこで彼は大経済コンツェルンの支配人として多年にわたり活躍した。先ずは巨大鉄道事業の指揮において、次いで製鉄業において優れた組織能力を発揮した。それと並行してパレートは、副業的にだが、国民経済学理論に手をそめた。農業関係者の学会メンバーとなり、一八八二以来そこから、厳密に理論的な内容の小論を何篇か発表した。一方でパレートは最上流社会での刺激的な楽しみにも耽った。彼は、心豊かなコンテッサ・ペルッツィが彼女の邸宅で催す夜会や祝宴の常連であった。元気一杯で論争好きの男の華やかな暮しぶりもさることながら、精力的で自信にみちた物腰については、同じ時代を生きたフローレンスの回顧録作家ならたっぷりと物語り得るであろう。彼が私に贈ってくれた写真――彼は仮装舞踊会でアラビアの族長に扮装していた――から察するに、パレートはなかなかの美男であったにちがいない。一八九二年、ヴィルフレード・パレート侯爵の人生に一大転機をもたらすことになる事件がおきた。スイス・ヴァート州の指導的な政治家と大学教授の小グループが、当時は実業を放棄し民間学者となっていたパレートを定住先のフィエゾーレに親しくたずね、レオン・ワルラス亡き後空席となったローザンヌ大学の国民経済学の講座を提供してきたのである。ヴィルフレード・パレートは承諾し、それ以来居所をスイスへ移し、その後二度とそこを離れることはなかった。今や彼は所謂ローザンヌ学派（Ecole de Lausanne）の領袖となったのである。ローザンヌ学派は、他の問題ではそのメンバー間に流儀の相違があったものの、

その全員が経済諸科学の分野で他ならぬ数学的方法に与えようとつとめた優越的な地位によって際だっていた。正当にもシャルル・ジードは、ローザンヌ学派の核心をなすものは限界効用理論への部分的な依拠ではなく数学的方法の全面的な優先にあるということに注意を喚起した。(1)

(1) *Charles Gide*: Le hédonistes, in: *Gide et Rist*: Histoire des doctrines économiques etc., l. c., p. 592 ff.

ローザンヌでヴィルフレード・パレートは一世代の若きスイス人、といっても外国人も数多く混ってはいたが――中でも、周知の如く、ベニト・ムッソリーニはスイス亡命時代パレートの教えを受け、彼から口づてに数多くの批判的言辞を身につけた――、ともかく彼らに国民経済学と社会学の諸原理を教授した。ここローザンヌで、国民経済学、技術論、自然科学、宗教史、政治学、古典文学、心理学などにわたる深い造詣と、たゆまぬ勤勉とを証示する、かの浩瀚なる出版物が生れたのであって、それら出版物こそやがてその著者を、国際的な学界の最高の著名人の一人たらしめることとなったのである。この地で一八九六年に『経済学講義』"Cours d'Economie Polifique"（フランス語でのみ出版）が、一〇年後（一九〇七年）に『経済学草稿』"Manuel d'Economie



Politique" が出版された。もっとも後者についてはイタリア語版が一年先に出されていたが。これら最深の学識にみちた書物においてヴィルフレード・パレートは、経済均衡理論のもっている前提と帰結とを浮彫りにし、我々の学問でかってはぶりをきかせていたが今や時代おくれとなり、徹底的に考え抜かれてもいない、一連の所謂永遠の原則なるものを払拭してしまうという偉業をなしとげたのである。経済学上の教義論にかかわるこれら二つの記念碑的労作公刊の間に、一九〇二年再びフランス語で、二巻本の『社会主義諸体系』が出版された。ここでパレートは社会主義に対して徹頭徹尾悲観的であることを表明しているだけではなく、民主主義のデマゴギーに対してもこの上なく鋭い鋒をつきつけている。この容赦の無い批判のゆえに、世界大戦後になってパレートが行ったファシズムへの加担も、多くの点から納得できるのである。

一九〇九年頃彼を襲った重症の心臓病がきっかけとなって、パレートはローザンヌの教壇を断念し、――もっとも一九一六年だけは、説き伏せられて社会学に関する短い講義を行っているが――全面的にセリニィの別荘にひきこもることになった。しかしながらその病気をもつてしても、学者の不撓不

屈の研究活動を中断させることはいうまでもなく、抑制させることさえ出来なかった。それどころか、アンゴラ荘はこれまでにもまして、ありとあらゆる国からやってくる若い学者の文字通りの巡礼の目的地となったのである。ここに一つの鍛冶場が出現し、ここにこもって鍛冶屋は続く一五年間、これまでにもまして多産的に、あらゆる体裁で、極めて様々な内容をもおりこんだ著作を世に送り出した。我々はそれらの中から、殆ど相次いでフランス語とイタリア語で発刊された二巻本の『一般社会学提要』"Traité de Sociologie Générale"[1]の名前だけをあげておこう。

（1） Lausanne-Paris 1916, Payot.

歴史的生のうち人間の意識的行為によって惹起された事象のみならず、人間の恣意から独立した事象もまた、様々な目的によって規定されている。これが世にいう目的論のごくあたりまえの見解である。ところがパレート社会学では、今日の社会学はなべて全く形而上学的であるとみなされる。実証主義を自称する一部の社会学でさえそうなのである。そのうえ、数は限られているが、「キリスト教」社会学もあるというではないか。パレートによると形而上的という形容があてはまるのはオーギュスト・コントの「実証」哲学、そしてルイ一四世の宮廷に出入りしたモーの司教ボシュエの『世界史論』である。両者とも教条的だからである。この場合諸教義の相違などはどうでもよい。この観点からはスペンサー、ハトゥルノー、ド・グレーフの社会学も全く教条的、従って形而上的と断定される。自分が普遍的真理を所有していると考える者は、他の真理が世界に存在することなど決して認めないであろう。[1] それゆえ信心深いキリスト教徒と辛辣な懐疑論者とは同程度に不寛容主義に執着する。パレートは右に素描した意味で断固たる反教条主義者である。これまでのすべての試みに対してパレートは自分の学術的な二巻本によって、全く新しいもの、即ち、例えば物理学や化学の論文のように自然科学的作業を施した、純粋に実験的基礎に基づいた社会学を対置しようとする。こう表明することによってパレートは我々を、はじめからはっきりと、社会科学から形而上学を一掃するという自己の意図の方へと嚮導するのである。曾てのイエス・キリスト同様彼は、神殿から偽善的予言者を一掃すること、即ち、しばしば全く無意識のうちに本能、利害、必要、感情、更には道義性によって促された偽予言者の知恵と、科学に矛盾するのが当然な一切の事どもとを放逐するために必要な支えを設けること、これを自らの義務と考えている。

(1) *Vilfredo Pareto*: Trattato di Sociologia generale. Firenze 1916, Barbèra, Vol. I, p. 3 ff.

進行中の人類史は感情、本能、欲求、利害によって、即ちパレートが残基――残基には恒常性と不変性が具わっている――という総括概念のもとに要約した心理的・生理的過程によって規定されている。残基は、パレートが次いで派生体と銘名したもの、つまり出来事の演繹的部分の前提をなすものである。派生体のもとでパレートは、論理的には多かれ少なかれ擬制的である思考や熟慮のことを意味させている（擬似論理的な派生体）。これの助けを借りて人間は自らの行為を正当化したり、理性的に説明したり、己れの意図を「根拠づけ」たりしようとするのである。そのような哀れむべき試みにもかかわらず、理論の因果性は感情、本能、欲求、利害という根本原因に固着し続けるのである。それゆえパレートは進歩という概念を承認しえない。本書の筆者はパリで発行されている国際社会学会年誌一九一三年号において、人間の発展は複雑であるため進歩というものの進み具合には確実性、論理性、完全性はありえないと指摘したことがある。集合的生活は、尊大にも諸現象を体系化しようとする内在的傾向を有する定式化というものには向いていない。広義における歴史的



現象論の同時性と時代性では、堅固な発展法則を規定するには不充分である。進歩が確かに計量可能なものとして現象する純技術的なものは別にしても、「進歩」は時間的にも空間的にも厳密に限界づけられた領域でのみ確定しうるであろう。(1) パレートはこういう批判を更に押し進める。彼にあっては、歴史は、寄せてはかえす波の動きになぞらえられる。人類の経験は、それが何らかの目的に向って突き進んでいるという仮説のための立脚点を科学に与えはしない。人間的生起をいくつかの原理へと秩序づけたり、それらの下に属せしめようとする理論や願望は何ら研究の実をあげることはできないのである。(2)

(1) *Robert Michels*: Le caractère partiel et contradictoire du progrès, in Le progrès, Annales de l'Institut international de Sociologie, Tome XIV, contenant les travaux du huitième Congrès, tenu à Rome en octobre 1912. Paris 1913, Girard, p. 446 ff.

(2) *Pareto*, l. c., Vol. I, p. 480, Vol. II, p. 383.

更にパレートの教えるところによると、宗教的慣習は、それが理念乃至事実の単純な連合である残基から遠去かれば遠去かるほど、又それに内包された神学的、形而上学的概念の混合が大きければ大きいほど、それだけ一層よくもちこたえ

るのである。というのも、一民族の政体を変えるよりも、その宗教、慣習、伝統、言語――この総体が民族の実体をなす――を変えることの方がより困難だからである。その結果、政体の急進的交替でさえもこの総体の内容にはほとんど手を触れないでおくことになる。この項目には性道徳に関する国民の考え方や概念、その実定法への法的反映も属する。この命題を弁護するためにパレートは、平常時に国家は政治的犯罪のために訴追された外国人を互に提供し合うことは承諾しないが、性的異端者が問題となると躊躇なくそうするということ、後者の犯した犯行はたいてい、例えば政治的暗殺よりもはるかに危険性が少なくとるにたりないにもかかわらず〔処罰のために……訳者補充、以下同じ〕交換するという事実をあげている。しかしパレートに対してはこう反論しえよう。ある国民がその時に通用している（変わりうる）道徳概念に対する性問題での攻撃を、政治的な道徳概念に対する侵犯よりも重視し、従って重罰を課す場合、この判定は外国に加えられた災厄が問題であるときにのみ通用するのが普通であり、他方、国家元首の命をねらったアナーキストを元首と同国民の裁判官が裁く場合、彼は、通用している性道徳に対して、それに相当する犯行を犯した者よりも過度に重い判決を下すことは明らかである、と。外国の国事犯を保護し、彼のために庇護権を主張せしめるのはおそらく国家相互間に潜在する対立、もしくはせいぜい国がちがうという事実そのものにすぎないのである。

ミラノの経済学者で愛国者のジュゼッペ・ペッキォ伯爵はナポレオン時代とその後の時代を生きたのだが、一八二一年、精神的、学問的生産物は経済的生産、従って、総じて生産の法則にどの程度従うものであるかというテーマで学位論文を書いた。ペッキォの論文の各章題はこの興味深い著作の社会学的意図をうかがわせるものである。中でもペッキォは、精神的生産においても供給は、量的にも質的にも需要に対応すると主張した。この命題や他の命題をもとに、ひとはジュゼッペ・ペッキォを、カール・マルクスの連綿たる精神的先行者の代表として認めようと望んだ。といってもペッキォはやはり教条主義者というよりも、傾向を重視する発展史観の持主である。彼の主要関心は、経済の歴史をそれにまとわりついたイデオロギー的鉱滓から精練し、人間的事実をその真の根源にまで遡行することに向けられていた。ただ彼は時折葬り去ったイデオロギーに葬り去る得る新しいイデオロギーを対置しているために、己れの課題に常に忠実であることがで

きなかったことは確かだが。自覚的或いは無自覚的にペッキォの社会学的方法に従った者の数は枚挙にいとまが無い。ハーバート・スペンサーはその『社会学の研究』Study of Sociology (1873) の第二部において、人間が本質的に三つのグループに属することから生じる、その頭脳における幾つかの中枢概念の贋造について同様に不充分な方法で論じようとしている。その三つのグループとは国民、政党組織、社会階級であるが、それらには又三つの欠陥の源泉が対応している。にもかかわらずスペンサーは、人類の歴史は大局的にみて理念の歴史に存すると断言している。パレートはかかる見解の対局に位置している。パレートにとって歴史とは精神史などではなく、情熱と本能と必要の歴史なのである。それゆえ社会学は旧い語義での精神科学である必要はなく、むしろ実験科学とならねばならない。ひょっとしてひとはパレート社会学を非論理的行為 (Azioni non logiche) の自然科学とさえ銘名するかも知れない。そうだとすると、長大な二巻本は歴史認識の真の宝庫を意味することになる。何故ならば、疑いも無くパレートは、政治史、文化史、文芸史、就中古代史の精通者であり、自己の理論を、この宝庫に所蔵された無限の実例によって実証する術をこころえているからである。好色ものの小篇『貞節主義者の神話』Le Mythe Vertuiste (Paris 1911, *Rivière*) の著者としてパレートは、周知のように、宗教史と神学においても並はずれた造詣の持主であることを示した。

大雑把にではあるがパレートは又、特に統治術の本質についても論じている。このジュノア人の経済学者と例の偉大なフローレンス人の書記との精神的親縁性が明らかな点も少なくない。両人とも人間の精神生活の深くかつ悲観的な認識、それに「予言」の全き断念、即ち道徳的教宣によって人間を改善せんとする意志の放棄に足場を据えている。パレートに従えば、支配の術は決して新しい残基に存するのではなく、それはむしろ旧い残基を賢明に応用することにこそ存する。支配とは、新しい目標を示し、もしくは新しい法則を発見し、それに基づいて人間の思想や本質に変化をもたらすことではなく、歴史が支配者の用に供する人間という資料の内に現存する傾向を認識して、それを新しい進路へ嚮導することを意味する。換言するなら、賢明なる統治の使命とは、自らの政治の手段を作り出すことではなく、与えられた在庫の中からそれを発見し応用することであろう。それは時代を先取りすることは出来ず、時代と共に進むことが出来るだけである。

皮相な考察では、愛国心とは領土的に係留されているようにみえる。何故なら近代的国民はそれを自らの居住する土地から導き出すからである。しかしながら、よくよくみてみると、領土はいわば、その上でなされた民族という文化的、人種的共同体の発展の仮説のための引き立て役にすぎない。愛国心を分析した折パレートのたどりついた結論は、宗教、道徳、正義の概念や善悪の概念があらゆる科学的解明を拒むのと同様に、愛国心を科学的に解明し尽すことは出来ないというものである。「このような表現はすべて、明晰な定式ではなく、全く不透明な限界のみを示す感情の一定の集積、凝集体に固有の慣性によってのみまとめあげられる集積のことを想起させるにすぎない。」(1) 我々は別の機会に、このパレートの概念もしくは概念分裂を批判的に論じようと思う（祖国に関する拙著において）。ただ一点だけ、歴史的観点から今のうちに記しておきたいことがある。近代的民族の大部分はその占有している土地に因んで自らを呼称しているというのは正しくない。そうではなく、経緯は概ね逆であった。つまり、占有者が占有地に自らの民族名を付与し（フランス、ドイツ、トルコ、スロヴァキア、ロシア、ノルウェー等々）その名称がこの土地に永久に落ち着いたわけである。

(1) *Pareto*: Transformazione della Democrazia, Milano 1921. Corbaccio, p. 69—Vgl. *Alberto Cappa*: Vilfredo Pareto. Torino 1924. Cobetti, 86 pp.

ヴィルフレード・パレートの理論が現代社会主義の理論に対してきわだっているのは何故か、又どの点でそうなのか、これについて報告することは余計なことであろう。彼の内面的本質は反社会主義的であった。彼の理論、彼の生活習慣、思考習慣は極端に「社会」と対立的であった。大方の社会主義論が依拠している倫理的根本原理、正義愛、同朋感情、協同感情、連帯はこの偉大な没倫理家には単なる派生体のように思えた。そのうえ彼にとって、彼自ら語るように、聖なる三位一体の奥義とカール・マルクスの剰余価値論との間に本質的な相違は存在しない。それは、彼によると、大魔王に対するキリスト教徒の憎悪と、三重に邪悪な社会主義に対するブルジョアの憎悪、ブルジョアの搾取者に対する社会主義者の憎悪との間に相違が存在しないのと同様である。

しかしながらパレートは社会学者マルクスと経済学者マルクスとの間には区別を設けている。(1) 後者は拒けるが前者には敬意を払っている。

(1) *Pareto*: Sistemi Socialisti, Milano, 1st. Ed. It., vol.

VI, p. 210.

パレートは、社会主義政党の政治の中に不純に表現されたマルクス主義政治のしたたかな敵手であった。にもかかわらずパレートは、イタリア社会党の指導者に対しては寛大であり、時にはほとんど好意的でさえあることを示した。その主な原因は以下の二つの契機に求められよう。

先ず第一に、パレート自身が生涯その父親と同じ道を歩んだということ。彼の血管には反逆者の血が流れていたのである。彼は体制の怒れる敵対者であった。彼の敵対物はほとんど共和主義に関係していた。この点で彼には確かにかなりの貴族主義が潜んでいた。皮肉屋は――偉大な皮肉屋は自らも又皮肉られるものである――笑ったものである、それはパレート家とサヴォイ家との間のいさかいである、と。私的問題〔である、と。〕一九世紀末葉の数年間、パレートの反体制的敵愾心は先鋭化する。彼自身それを繰り返しはっきり表明した。デプレーティスからジョリッティまで、イタリアの運命を左右する歴代内閣は、短期間のわずかの例外を除いて、民主主義の仮面を着けた純粋の寡頭制であり、しかもこの国を悩ませている災厄を防止する能力も無い、と。こうしてパレートは、ある期間、ブルジョア急進派、共和主義者、社会主義者の混成部隊である所謂最左派 Estrema Sinistra のお気に入りの代弁者の一人となったのである。とりわけ彼は、政府の金融政策の極めて激しい断罪者であった。その目的のためパレートはフランスとイギリスの有力な経済誌、政治誌を利用したために彼の批判は非常に有効ではあったが、不都合な面もあり、その頃は贋イタリア人という至当な非難をも招くことになった。今やパレートはその政府攻撃のゆえに社会主義者と固く腕を組むことになり、その後それは同盟関係――第三者に対抗する二者乃至それ以上の共同性より生ずる連帯――へと発展していった。内閣攻撃の前提は異っていたし、それどころかしばしば正反対であったにもかかわらず、貴族主義者パレートはミラノ学派の民主主義者、トゥラーティの『クリティカ・ソチャーレ』誌に結集したマルクス主義者、そしてエントレ・チッコッティとアルトウーロ・ラブリオーラの独立社会主義派の知識人たちと同一歩調をとることが多かった。

理論的には異質な社会主義者とパレートとの暫定的友好関係の第二の原因は、聡明で教育もある上品な人々と迫害された名士とに対する二重の偏愛にあった。双方に該当する人間は社会党内に溢れるほど存在していた。

従って、一八九八年ミラノの流血事件の後、投獄を免れ首尾よく隣国スイスに逃亡し得た数多くの重要な社会主義的大学教授が彼を頼ってやって来た時、パレートは喜んでジュネーブ湖畔の別荘の美しい部屋と涼し気な並木道とを提供したのだが、これは納得できることである。(1)

(1) *Roberto Michels*: Storia critica del movimento socialista italiano, l. c., p. 205.

後年パレートは様々な潮流の社会主義者を改良主義者と革命家とに区分している。彼らが反体制闘争の緊急段階を克服した直後から、パレートは、戦術的見地から議会主義を志向し、権力参加を追求する改良主義者を軽蔑していた。それは彼らが政党政治的には見分けのつかないほどに一体化していた民主主義者に対してと同様であった。パレートは改良主義者をデマゴーグ、ペテン師、利権屋とみなしていた。革命的社会主義者に対する彼の態度はそれとは異っていた。パレートは彼らのうちに信念と勇気と善意の人をみとめていたからである。彼が楽観的な気分にある時は、彼らは一つのエリートを形成する能力があるとさえ考えていた。というのも、彼らの（すべてではないにしても）何人かは、平板でめめしい民主主義と融合するという仕儀には決して及ぶまいと想定していたからである。サンディカリスト派の最良の舌鋒〔ソレルのこと〕から発せられる容赦の無い民主主義批判はセリニイの社会学者の熱烈な賛同を獲得した。彼は自分がサンディカリスト派と強い親和力でむすびついていることに気づかざるを得なかった。なるほどパレートはサンディカリズム理論の神話的側面をきっぱりと拒絶し、その正義に対する信念を真面目には受けとらなかったけれども、歴史家なら次の事実を無視することは出来ない。即ち、彼が晩年の一〇年間規則的に書簡を交換した誠実な友人の中にはかのジョルジュ・ソレル、サンディカリズムの独自の理論的創始者であり、晩年、パレート存命中に出したプロレタリアの歴史的資料に関する著作の中では自らをロシア・ボルシェヴィズムの独自の創始者と誇ることが出来たジョルジュ・ソレルも入っていたのである。(1) 二人の見解が異なるところでさえパレートはソレルを特別丁重に遇し、そしておもむろに、二人が一致した数多くの領域での歴史的考察を強調するのが常であった。しかも、ソレルと革命的サンディカリズムに対する称讃は、その後、一部のファシストにも引き継がれていったのである。(2)

(1) *Georges Sorel*: Matériaux d'une théorie du prolétariat. Paris 1919. Rivièr.（序言）。

（2）例えば *Curzio Suckert*: L' Europa vivente-Teoria storia del sindacalismo nazionale; Firenze 1923. La Voce. p. 85. を参照。

史的唯物論に対してパレートは、自己の理論に従って二正面的構えを保持した。一方で彼は、唯物史観は歴史的生起の因果性を異論の余地無く説明するには不充分であると主張し続けた。歴史の働きは常に非常に複雑であるので、それを捉え尽すことにはいかなる定式も成功しないであろう。しかし他方でパレートは、史的唯物論は、純理論的に考察するなら一面的であろうとも、科学そのものとプロレタリアートの実際的利益にりっぱに貢献しえると明言していた。戯れにパレートは唯物史観を労働者階級のイデオロギー的上部構造と呼んだことがある。

約二五年前に公表した社会主義批判のための二巻本（『社会主義諸体系』）におけるパレートは、学問的にはマルクス主義からはるか遠くに位置していたのだが、彼の社会学全体としては史的唯物論に再接近しているようにみえる。願望や必要が階級的区分に従うことは経験的認識であるという前提から出発し、パレートは唯物史観を労働者階級の自然な、その社会的必要に最も適合的な理論とみなしている。ただその場合、唯物史観に、マルクスとその使徒たちが与えるような科学にとっての客観的で一般的な意義をも同時に承認するということはない。

この点についてパレートは『社会学提要』Trattato di Sociologia の第一巻でこう表明している。史的唯物論とは、歴史哲学の分野におけるこれまでの業績を越える重要な科学的前進を意味している。この「科学の歴史にとって史的唯物論の有する意義とは、道徳とか宗教とかの諸現象の間には、それまで信ぜられていたような（そして今日でも多くの人が信じているような）絶対的な関連は存在せず、偶然的な関連（存在はしうるが、必ずしも必然的に存在するには及ばない関係）が存在するにすぎないという認識に貢献したことに存する。更にこの新しい教義は、社会的契機と経済的契機との間の相互依存関係を確定することによって正しい核心を有することは疑い無い。その欠点は、この相互依存関係のうちに原因結果の論理的関係を認めたことに存する。」(1) 第二巻でパレートは、部分的には第一巻で既に述べたことを敷衍しながら、人間の感情世界は彼の職業区分と合致していることは承認せねばならないとつけ加えている。こうすれば、残基が経済状態に依拠しているという観測をもとに、所謂史的唯物論は残

基の理論に還元されうるわけである。これは確かに真実であろう。誤謬はただ、経済状態をこれと相互に作用し合っている他の社会現象から切り離し、観察された結果にたった一つの原因を想定することであろう。現実では、作用と反作用の全系列は様々な現象間の相互依存関係によって惹起されうるものだからである。(2)

(1) I, p. 426.

(2) II, p. 275—77. また *Pareto's* Sistemi Socialisti, l. c., p. 211. をもみよ。

パレートが階級闘争理論に反対するもう一つの論点では、議論はおそらく社会学者マルクスよりも経済学者マルクスに、就中、師匠本人が違いをはっきりさせるために自分はマルクス主義者ではないと言うのを常としていた一群のエピゴーネンに向けられている。パレートは、プロレタリアート内部にも組織労働者と未組織労働者、階級意識に目覚めた者とそうでない者との間に争いがあり、ブルジョアジー内部では小ブルジョアジーが百貨店と勤勉で有能な競争相手一般——彼は不正な競争と呼んでいる——に対抗するために国家の援助を強く求めていることに注意を喚起することによって、対立する二大階級という単純な見方を否認しているからである。(1) もっともマルクスは階級闘争という概念（この表現は相闘う階級の数については何ら語る術をもたない）によって、下位階級の存在を否定したのではなく、ただ二大階級の優位を理解していただけなのであるが。それにしても階級闘争理論は二階級理論に頗る近接しているのである。

(1) *Pareto,* Sistemi Soicalisti, l. c., p. 267.

パレートをして史的唯物論の科学的・人間的価値に敬意を払わしめた複雑な原因は本質的に二つの思考系列のうちに目出せる。

(a) 感情と本能と利害との区別は科学にとっては適切であっても、政治にとってはそうではないとパレートはみている。何故なら、実践的政治と人間生活一般（前者は彼の関心を全然引いていないし、後者については彼は一切発言していない）に対し、信仰と感情の価値を否認することほどパレートと無縁なことはないからである。彼の教えるところは全く逆で、信仰と、それにもまして異った教義間の信者獲得競争とは、健全な民族生活にとって、まさしく不可欠のセメントを意味しているのである。パレートの確信するところによると、信仰をもたない——ソレルなら神話をもたないというであろう——民族はその価値を喪失することになろう。何故な

ら、信仰をもたない民族は怠惰と腐敗、更には愚かな悪徳という泥沼で己れを失うことになろうから。[1] 非論理的行動には深い存在理由がある。というのも、人間は宗教無しでもやっていけるとか、宗教は単純な科学的定式で代替できると考えることは無邪気な誤謬であろうから。[2]

(1) p. 264.
(2) p. 283.

パレートの理解の中心には有用性の概念と真理の概念との論理的峻別がある。それ故彼にあっては、理論のもつ社会的、政治的等の効用並びに有用性と、それの事実との関係（客観的真理）との間の分裂も生ずる。パレートは、政治的に考えると真理が有害であり、非真理（幻想）が有益であることも可能だと考えている。それはとりわけ高度な国家政策の場合にあてはまる。

一六七三年フランス人の末裔であるイギリスの哲学者バーナード・マンデヴィルは一つの好色な寓話を書いた。それは全ヨーロッパの宮廷で彼の人気を高め、あらゆる道学者の激しい攻撃の矢面に彼を立たせることになった代物である。その本の中で彼は私人の悪徳＝公共の利得という等式をうち立てた。[1] つまり私人の悪徳（贅沢、浪費等々）は公共の福祉に



役立ちうるというわけである。このような気取った公理にパレートは同意はしなかったであろう。しかし彼が、あえて云えば、ベンサムの如き功利主義――善と有用性との概念的等置、もしくは少くとも、それらの実効性の等置――よりは、マンデヴィルの精神的指針の方にはるかに近く位置するということは疑い得ない。

(1) (*Mandeville*): La fable des abeilles ou les fripons devenus honnêtes gens. Avec le commentaire où l'on prouve que les vices de particuliers tendent à l'avantage du public. 6ème ed. Londres 1640. Au dépens de la compagnie. 6 Bände. 特に第一巻をみよ。

(b) 今までみてきたように、パレートは史的唯物論にはそれ自体正しい核心があるということを認めた。マルクス－エンゲルスが共産党宣言の中で当時のドイツ社会主義、即ち真正社会主義を叱りとばしたと同様に、パレートは、階級闘争の存在をあからさまに否定し、自由主義と楽観主義を同一物の二つの表現とみなすようなブルジョア知識人をしたたかに嘲笑した。社会における富と貧困の存在を、双方とも無限の程度差を含んでいるという理由で否認しようと望むことは、丁度、中間の価格があるという理由で価格形成の領域で高いとか安いとかいう概念を否認するようなものである。諸階級の

間に事実上、ゆるやかでほとんど気づかれないほどの移行段階があるからといって、社会階級の存在の客観的に確定しうる事実としての性格が無くなるわけでは決してない。[1] パレートは次のような点でマルクスを承認している。他ならぬ社会学の領域で多くの思想を解明し、彼以前にはほとんど知られていなかったか、わずかの人によってしか表明されなかった思想を世に知らしめたこと、そして就中、事実というものは人間の思想を通して解明しえる――現実ではその関係は全く逆なのだ――と称する考え方の不条理を論証したこと、これである。[2]

(1) p. 236.
(2) p. 219.

要するにパレートは史的唯物論に批判、科学、実在としての性格をみとめ、それを、ダーヴィニズムの生み出した大きな思想系譜の中に位置づけている。こういうものとして史的唯物論は真の概念論の一部を成しているため、マルクスが他の何もの、何びとに対してもそれを擁護したそのエネルギー、その精神力に驚嘆せざるを得ないのも当然なのである。[1] いつの日か、ここでは暗示しただけのパレートとマルクスの体系の比較をより詳しく論じ、二人の教義上の対立がどこで始まりどこで終わるかを指摘できれば、それは必ずや興味深いものとなろう。

(1) p. 220/21.

一九一七年ローザンヌ大学総長はパレートの教授在職二五周年を祝うべく世界中の大学からひとを召いた。[1] パレートは七〇才であった。戦争の真最中であり、世界は炎と化していた。にもかかわらずこの記念式には主要国の大学人が参加した。スイス、フランス、イタリア、アメリカは祝賀人の大部隊を送りこんだ。ドイツからは、この記念祭にフランクフルト・アム・マイン大学より祝辞が寄せられた。この他ならぬ敵国からの予期せぬ賀状は彼をことのほか喜ばせた。この祝賀祭はパレートの享受する国際的承認を証するものであった。それが予想を越えるほどのものであったことは次のことを考えてみればはっきりわかる。即ち、彼が学派の思想や学問と政治における公的立場には一切無頓着な、純粋に学問的な著述家であったために、また、しばしばホーエンツォレルン家の君主フリードリッヒ二世を想起させる、公私にわたる法外な嘲笑癖、同学の士に対する時には不遜なほどの仕打ち――というのも、彼に気に入られるということは至難の業であり、他方で彼はローリアからジード、シュモラーに至る、社会的、

社会政策的、社会倫理的、社会主義的、歴史的、保守的――御用学者的な学派のすべてを、意地悪くも文士の経済学（ここで文士という言葉は、嘲笑的な意義の「内容の空虚な言葉だ」C'est de la literature というフランス語の云い回しからとられている）と総称していたからだが――のゆえに、ヴィルフレード・パレートには錚々たる敵手が多勢いたのである。

（1）一九一七年ローザンヌ大学でパレートの栄誉のために催された祝賀会については、トリノの経済学者ジーノ・ボルガッタの筆になる小冊子（L'opera sociologica e le feste giubilari di Vilfredo Pareto. Torino 1917 S. T. E. N.）が詳しく報告している。ここで行なわれたパレート本人、パリのジード、ローマのバンタレオーニ等の講演は、パレート社会学等の位置、彼自身の見地と意図とを適切に描いているので、図書館には必需の文献となろう。

パレートのライフワークの主眼は常に、自然科学の実験方法に類似した方法論、証明しえない、それ故に早急で不確かな結論を出来る限り避けるべき方法論を可能な限り社会科学と経済科学に適応することにあった。こういう理由のためにパレートは、実験的に検証できる実在という意味での科学を押し進めることを己れの唯一の使命とみなしたのである。なるほど彼は、それが如何なる政治的、学問的、宗派的傾向であれ、感情や義務感や信仰や理想は人間生活と国民生活にとって巨大な価値を有すると主張したが、それは、感情には行動を喚起し衰弱と懶惰をはばむ能力があるとみたからにすぎない。

世界大戦は彼の冷静さを奪うことはなかったが、非常な興味を彼に抱かせた。戦争の中に彼は何よりも大衆心理学の観察材料を豊富に見出した。ただその中に理想的、国民的要素を捉えることには成功しなかったが。理論社会学の二巻本に、世界大戦のもたらす豊かな収獲を先取りすることになったであろう第三巻目を追加するという初期の計画はただちに放棄された。一つは彼の手元に集まった資料の膨大さのためであり、もう一つは、かかる課題には体力はもちこたえられないと感じたからである。ビニャーミがルガノで出していたCoenobium誌、リニャーノがミラノで出していたScientia誌に戦時中に自ら公表した数篇の論文からは、彼のこの事件に対する姿勢がどれほど純学問的であり、かつ懐疑的なほど中立的であったかがわかるのである。ドイツでは、内面的吸収力も同化能力もないあつかましい向う見ずがウィルヘルム二世によって体現され、それはベートマン・ホルヴェークの

如き人間の民主主義を装った拙劣な偽善によって一層悪化されていると彼はみた。他方協商国側では、他ならぬ彼が生涯の間闘ってきたもの、即ち、大衆をあてにした純粋な民主主義が彼の反発をまねいた。そのため、もともと抑制のきかない私的な談話においてもパレートの舌鋒は自ずと鋭くなり、そんな折は〔彼の内なる〕反民主主義者がイタリア人を駆逐してしまったかのようにみえる時が幾度かあった。にもかかわらず彼は、心の奥底では自らをイタリア人と感じていた。これは、私が客人として又証人として請け合うことの出来る逸話が証明してくれるであろう。カポレットの敗北の数週間後のある時私達が食卓について、パレートがイタリアの「然るべき運命」について熱心に語っている時、ローザンヌ紙が、ロンバルディア平原と、勇気に溢れ期待に胸ふくらませていたミラノへのオーストリア軍の前進を阻止することに統師部が成功したとのニュースをとどけてきた。パレートは黙って立ち上り、数分後には同じく黙ってシャンパンを二本腕にはさんでもどってきたのである。我々は一言も語らずに杯を打ち合わせた。彼の顔は喜びに輝いていた。

死の数ケ月前パレートは、ファシズムによる国家権力の掌握というイタリ政情の激変の立会人となることもできた。既述のように、セリニィの賢者はこの運動に祝福をさずけた。更に又パレートはムッソリーニによって、イタリアの学問の外国における声望を高めた業績のために、遂には王国の上院議員に任命された。戦時中の彼の態度は批判を招いてもよさそうだっただけに驚きは一層大きかった。だがやはりファシズムの理論は基本的には、彼がリベラル派と協働した時でさえも窮極的には自由主義イデオロギーを軽蔑し、とりわけ自由の概念を軽蔑していたパレートに基礎を置いているのである。(1)

パレートはムッソリーニの啓発者の一人である。パレートは政治的著作のすばらしい宝庫を残してくれた。それには問題の晩年のものも含まれている。没後、彼の見地の特徴を示す幾篇かの思索の断片が、『政治的遺言』というおそらく多少誇張された表題の下にイタリアの定期雑誌に掲載された。(1) それらはそれ自体で興味深いというだけではない。それらは、パレートが自らの理念をたずさえ、部分的にではあれその誕生に手を貸しさえした現体制を模範的に表現しているという

(1) *Luigi Strati*: Il Fascismo osservato attraverso le Teorie di Vilfredo Pareto. La Vita Italiana (Roma), Anno XIII, fasc. CL/CLII, p. 11 ff.

先に示唆した理由からも重要なのである。

(1) *Vilfredo Pareto*: Testamento politico. Pochi punti d'un futuro ordinamento costituzionale, in Giornale Economico, I, Nr. 18 (Rom., Sept. 1923)

先ずパレートは国民主権を信じてはいない。彼は議会に対しては率直に侮蔑を加えている。ファシズムは自らが大衆に担われることを望んでいる。ローマ進軍を「武装した人民投票」と呼んでいる。同じ理由からパレートは、なるほど統治には大衆の同意が必要だが大衆の協力は不要だと主張している。議会多数派に頼ろうとしても無駄である、何故なら、如何なる多数派でも分裂と衰退という不断の脅威にさらされているからである、と。赤裸々な暴力で統治するのも同様に賢明ではない。従って統治の基盤は強力の外にも、つまり世論の同意にも求めなければならない。この目的のためには、当面は議会と国民投票が非常に有効である。それゆえともかくはパレートも議会の廃止を支持する気持はもたなかった。彼の思うに、議会という制度は、ともかくは存立している以上、保持されねばならない。政治家の使命は、議会主義の危険性を出来るだけ予防する手段と方策を見つけ出すことに限定される。その予防は、民主主義のより始原的な形式、即ち直接的な形式へとしだいに復帰することによって初めてなされるであろう。直接的形式の民主主義はなるほど良くはないが、後の間接的形式の民主主義よりはましなのである。パレートの言葉で言うなら、人民支配にはさほど価値はないが、それでも国民代表〔議会〕の支配よりも価値はある。ここでパレートは、議会制原理の矯正方法を国民投票に見出したスイスを参照している。議会主義の味方は、いずれにしてもイギリスを引き合いに出すことは出来ないであろう。何故ならそこで言われている民主主義とは、詳細にみるなら、歴史的な二大政党の一方の独裁より成り立つにすぎないからである（イギリスにおける現代の政治危機の行く末を見通すことはまだ出来ない）。従って問題は、いまだ国民の間で生きている民主主義イデオロギーをなだめるために、議会主義を装飾的要素として温存し、同時にそれを無害にすることとなるにちがいない。

パレートにとってとりわけ重要なのは出版の自由である。というのも、これが無ければ如何なる権力も長期間存続することは出来ないからである。この知恵の命令に考慮を払わなかったがために、既にしてナポレオン三世とロシア・ツアーリズムは自らの墓穴を掘ることになった。それが不道徳に対

する闘いであれ、将又革命に対する闘いであれ、とにかく検閲は支配の最悪の手段なのである。「烏は鳴かせておけ、しかし、事実に対決するに容赦があってはならぬ」とパレートは、全く、国家理性論の科学的創始者ジョヴァンニ・ボテロの精神（一五八九）で国家の指導者たちに檄をとばしている。政治的遺言の他のところでもパレートは透徹した言葉で、大衆の思想の自由を尊重し、大衆の感情と意図をないがしろにしないようにと権力者に勧めている。何故なら、大衆に己れの個人的な感情を押しつけるために、国家の権力手段を利用するチャンスを小さな集団に与えることは統治の任務ではないからである。

しかしながらパレートの政治戦略は、明言されてはいないが、結局はやはり、支配のための既存の根本条件を慎重に計測することにきわまる。この政治戦略は、ひとがそれをどう非難しようとも、とにかく決して反動的な絶望の政治をひきおこすものではなく、パレート自身が誇らしげに宣言しているように、マキァヴェリズムを呈示しているのである。といってもそれは精練されたマキァヴェリズムであり、その目的のためには、現代的な大衆心理学の成果と認識、それに現代史の教訓を利用する底のマキァヴェリズムなのである。

パレートによれば、議会主義の抜本的無害化は、決定的な政治的影響力の下院会議室からエリートへの移動の最終帰結として生ずる。パレートは高度に政治的な大問題においてのみ、議会を大衆心理学的もしくは大衆病理学的要素とみて発言の機会を与えようとしている。しかし実践的な管轄に属するあらゆる問題では、議会ではなく国民総体の巨大な動向——その最も自然で優越的な頂点は政府にあるのだが——が決すべきである。かくしてパレートは、この議会外的な権力エリートの創出過程を快調に進撃しつつあるファシストに賞讃の言葉を贈るのである。国家機構をエリート原理の下に服せしめんとするのは実際ファシストの意図である。このエリートには、見識ある生産者評議会の他に更に消費者評議会も一種の拡大枢密院として加えられるはずである、パレートの学問生活は、単なる顧問の役割を越えてイタリア・ファシズム史に介入する機会を得ないままその終焉を迎えることになったのである。